

報



會

會 岳 山 本 日

96

月 八 年 五 十 和 昭

偶 感

藤 島 敏 男

1

山での遭難が近頃のやうに頻々と續發すると、山の危険が叫ばれ、遭難防止が論じられるが、この問題は中々生易しいものではない。

遭難者が経験の浅い人の場合もあり、充分の経験を積んだ人の場合もある。遭難箇所が何人がみても危険の潜む箇所もあれば、あんな所でと思はるゝやうな平易な箇所もある。避け得べかりし遭難もあれば、不可抗力と思はるゝものもある。これらの種々の條件が錯綜してゐるのだから、ひとつの遭難事件に就いて判断を下すことは本當に難かしいことである。同時に將來の遭難を防止するといふことも容易ではない。

例へば谷川岳東面の岩壁に於て遭難が多いからといつて、登攀禁止の制札を立てる譯にもゆくまい。現に登攀を禁じたアイガーの北壁でも禁令發布後完登者が堂々と名乗りを上げてゐるといふ始末だ。或は登山者の技術によつて登攀を許可制にするといふやうな、統制ばやりの世の中に考へられ相な説もあるが、馬鹿氣た論である。登山技術は工場に働く熟練職工みたいに、或る規格を以て律することは殆んど不可能だし、またいかに優れた登山者でも決して不

慮の災に遭はないとは何人も斷言し得ないからである。

言ふまでもないことだが、要は各人が自己の力を過信せず、登山に際しては充分の注意を拂ひ無理をしないといふこと以外に遭難防止の策はない。山に於ける遭難は登山者自身が自己の責任で防止すべきもので、第三者が規則の如きを以て之を防止しやうとしても大して効果はないであらう。

遭難事件に關して思ひ合はすのは新聞記事の扱ひ方の仰山なことである。誇大なばかりか間違ひが多い。そのために世人の登山に對する考へを誤らせる罪や大なりと言ふべしである。一體、山の遭難記事がそんなにニュースヴァリューのあるものであらうか。關係者その他の蒙る迷惑を顧慮するならば、交通事故を輪禍と小さく扱ふやうに、山の遭難も山禍とでも簡單にして貰ひたい。

遭難防止で思出すのは、フランスの自動車道路にある事故防止策のひとつである。曲りくねつた急勾配の坂路など事故を起こし易い所には、そこに到達する前に「この先き注意を要す」危険なる箇所あり」といつた立札があり、いよゝその場所に掛ると、遭難記念碑の前の臺石の上には無残に潰れた自動車の残骸が眞赤に錆びたまゝ安置してある。これを目の當りみては、いかに亂暴な操縦者と雖も速力を緩め細心の注意を拂はずにはゐられないといふ趣向で

ある。餘りに現實的な殘酷な事故防止方法だが、効果は確かであらう。これに似たやうな遭難防止策でもとられたら、それこそ山にゆく人はなくなつて了ふ。そんなことにならない内に銘々で遭難しないやうに自らを戒めたいと思ふ。

2

六月に入つて新聞や雑誌が、きまつたやうに山の記事や隨筆を載せ始めると「この夏はどこへお出掛けですか」と質問を受けることが多いが、私は「夏はどこへも出掛けません」と答へるのを常としてゐる。超満員に詰めこまれた列車、開放された窓から遠慮もなく飛び込む煤煙と埃、目的地へ着いてからの乗合自動車の奪合ひ。山小舎の混雑と喧騒、考へただけでゾツとするやうな不快さを堪え忍んでまで夏の山にゆく氣は毛頭ないからである。

所謂日本アルプスは、澤にも、尾根にも、山頂にも登山者が引切りなしに現はれるだらうし、或は靜かな取残された箇所があるにしても、そんな所へゆくのは手間がかかるだらうし、中級の山々の夏は藪漕ぎだの草いきれを想ふと、どうにも出掛けの氣が起らない。

學生達は餘り長くないが、とにかく夏休みといふものがあるのだから、夏の山に登るのもいいが、一年に十日か二週間の休暇を虎の子のやうに大切にしている人達は、何もわざわざ混み合ふ夏の山を選ぶに當る

まい。

春は四月五月、秋は十月十一月。

山は夏よりも遙かに靜かで美しい。何を好んで夏の山などに登るものかと、私は昭和三年の夏潤澤の岩小舎に一週日を過ごして以來日本の夏山に登つたことがない。山どころか高原の山莊に誘はれてさへも腰を上げないで、春の山の回想に耽り、秋の

目 次

- ・ 偶 感……………藤島敏男……………一
- ・ 初夏の楢形山……………吉澤一郎……………二
- ・ 甲斐駒(繪と文)……………古田 彰……………三
- ・ 小森宮章正君を偲ぶ……………金山淳二……………四
- ・ 獨り旅……………山田奈良雄……………四
- ・ 圖書紹介…………………………五
- ・ 會員通信…………………………七
- ・ 會務報告…………………………七

山の計畫を心に描いて夏を送ることにしてゐる。

登山季節が夏だけに限られなくなつてから年既に久しいにも拘らず、夏季に於ける登山者の殺到は年々歳歳依然として變らない。汽車も混めば山小舎も混む。そして誰も彼もが不快な思ひをさせられてゐるのである。なにかよい對策はないものだらうか。



◇へ山形櫛の夏初◇

吉澤一郎

澤間は自動車で無賃連絡となつてゐるらしい——に乗つて甲府盆地を横切つて行く。朝の天気はよくなかつたが舞れる気配は充分にあつた。長澤新町は六時半。(之からは陸測五萬の鯉澤圖幅——昭和四年修正測圖——を見乍ら読んで戴きたい)

天氣は次方によくつて来る、目指す櫛形山の山頂附近が雲の切れ目から見えて来た。此の邊からだと思ふ、之から凡そ一八〇〇米突も登るのでもない。部落では鯉の大きさが二寸程になつてゐる。春米から大久保へ渡る利根川の橋の手前を右折して川沿ひに西に向ふ。川には水は餘りない、然し大きな岩がゴロゴロしてゐる。之は川の傾斜の急な事を示してゐるものと思ふ。地圖に「利根川」とある附近は山側が迫つて多少峡谷状をなしてゐる。朝鮮の同胞達が杉丸太を擔いだり、或は車に積んだりして下りて来る。崩壊地の南側にある橋は「方丈橋」といふ。(七時五十分)之を渡つて又直ぐ小澤を過ぎ西北へ登ると急に谷は開いてしまつた。新梨の部落が崖の上に見える。南平の廣い斜面の向ふに大きな

お寺の屋根が二つあつた。地圖を見てもわかる様に櫛形、源氏山を含めた山脈の東側は一體に急激に落ちてゐて、而も七、八〇〇米突附近に臺地が點々と見られる。階段的な斷層による地形ではないだらうか。尤も之は素人の私がさう思ふといふだけの話であるから餘り當てにはならぬ。南平へ折れる所に「御三夜橋」といふ小さな橋が利根川の上に架つてゐる。その前に「登山記入所」といふ看板のかゝつたお菓子屋があつたので這入り込んで腰をおろした。(八時二十五分)此の邊の小字名は地圖にはないが「久保」といふ。長澤新町から約二時間。

二十分許り休憩してゐる裡に色々山の様子など聞いて置いた。地圖にある尾根道は今でもあるのか、使はれてゐるのかわからなかつたが、兎に角私達は神社から直ぐ西へ行く道を教えられた。久保平にある利根川の最後の橋は「鷹尾橋」と書いてあつた様に覺えてゐる。橋を渡ると急に杉の林の中へ這入つて涼しくなつた。地圖からも想像出来るやうに随分長い段々である。神社は「高尾神社」神様の素性は聞き洩らした。(九時十五分)境内には何處から引いて來てゐるのか冷たい水が樋の所から澤山流れおちてゐる。水は此の上の小澤にもあつたが此處が最後と思つてゐた方が安全であらう。神樂殿もあり、立派なお籠堂もその殿の下の平地に建つてゐた。櫻草に似た紅色の花をつけた草が小流の周圍に咲いてゐた。三十分許りを二回目の朝食に費して、教へられた通りに拜殿の左手にある指導標から山道へ這入る。

又一段高い臺地に出た。指導標があつて「右稜山及杖立ニ至ル、左鷹座集展望臺ニ至ル」とある。こゝは本當の鞍部よりは二町許り手前である。(〇時半)大きな唐松が草原の所々に立つて居り二千米突の頂稜上とは思へぬ程暢んびりした気分だ。後で氣がついたのであるが休むならば鞍部まで行つて置いた方がいゝ。そこからは白峰三山が眞正面に見えるからである。

吾々はリュックを置いて櫛形の最高點(二〇六〇米突)に向つた。臺地へ登つて一寸下りにかゝる時、亂雲の間に白峰の雪の肌が唐松の樹林を透して見えた。南アルプスの雄壯豪快な姿をはじめて見た同行の女性驚きの目を睜つて「アレ何ですか」と叫んでゐた。本當の山の姿を初めて眼にした人達にとつて、此の叫びは眞實の胸底からの叫びであつたらう。私達だつてさういふ時が嘗つてあつた。グイスブの谷を過つて行つた登山者は、ある道傍の岩角を曲つた時に、マツターホルンの餘りの巨大さに、そしてその頂の餘りの高さに、思はず息の詰まる程の感銘をうけるといふ。ヒマラヤの巨峰にしてはさうだと思ふ。出來れば私も再び三度、此の新しい驚異に眼の邊りぶつかりたいものと思つてゐる。

所で此の小鞍部附近の東側は秩父の雁坂峠或は大菩薩邊りを彷彿たらしめる風景であつた。期待してゐた櫛形山の最高點は森林が深くて眺望

六月一日(土曜日)は私の會社の創業紀念日に當つてゐて休みだつたので、會社の同好の士を五人程引き連れ櫛形山へ登つて來た。主な目的は白峰三山の殘雪を見るにあつた。近頃私は出来るだけ日曜の山行を避けてゐる。其の理由は今更茲に書き立てる迄もない。所が日曜の方の厄は遁れたが、一日は鮎の解禁日に當つてゐたので夜行の混み方は相當なものであつた。それにリュックサツクも飯盒も昨日買った許りといふいで立の男女混合のハイカーが何時になつても騒いでゐたのでおち／＼睡る事も出来なかつた。

甲府に著いたのは午前四時四十分土曜日の有難さ、身延へ行く叔父さん叔母さん連中の他には登山者らしいものも餘り眼につかぬ。驛前の飯屋で朝食を済ませ五時四十分發鯉澤行の市電(?)——峽西電鐵(青柳、鯉

天氣は次方によくつて来る、目指す櫛形山の山頂附近が雲の切れ目から見えて来た。此の邊からだと思ふ、之から凡そ一八〇〇米突も登るのでもない。部落では鯉の大きさが二寸程になつてゐる。春米から大久保へ渡る利根川の橋の手前を右折して川沿ひに西に向ふ。川には水は餘りない、然し大きな岩がゴロゴロしてゐる。之は川の傾斜の急な事を示してゐるものと思ふ。地圖に「利根川」とある附近は山側が迫つて多少峡谷状をなしてゐる。朝鮮の同胞達が杉丸太を擔いだり、或は車に積んだりして下りて来る。崩壊地の南側にある橋は「方丈橋」といふ。(七時五十分)之を渡つて又直ぐ小澤を過ぎ西北へ登ると急に谷は開いてしまつた。新梨の部落が崖の上に見える。南平の廣い斜面の向ふに大きな

お寺の屋根が二つあつた。地圖を見てもわかる様に櫛形、源氏山を含めた山脈の東側は一體に急激に落ちてゐて、而も七、八〇〇米突附近に臺地が點々と見られる。階段的な斷層による地形ではないだらうか。尤も之は素人の私がさう思ふといふだけの話であるから餘り當てにはならぬ。南平へ折れる所に「御三夜橋」といふ小さな橋が利根川の上に架つてゐる。その前に「登山記入所」といふ看板のかゝつたお菓子屋があつたので這入り込んで腰をおろした。(八時二十五分)此の邊の小字名は地圖にはないが「久保」といふ。長澤新町から約二時間。

二十分許り休憩してゐる裡に色々山の様子など聞いて置いた。地圖にある尾根道は今でもあるのか、使はれてゐるのかわからなかつたが、兎に角私達は神社から直ぐ西へ行く道を教えられた。久保平にある利根川の最後の橋は「鷹尾橋」と書いてあつた様に覺えてゐる。橋を渡ると急に杉の林の中へ這入つて涼しくなつた。地圖からも想像出来るやうに随分長い段々である。神社は「高尾神社」神様の素性は聞き洩らした。(九時十五分)境内には何處から引いて來てゐるのか冷たい水が樋の所から澤山流れおちてゐる。水は此の上の小澤にもあつたが此處が最後と思つてゐた方が安全であらう。神樂殿もあり、立派なお籠堂もその殿の下の平地に建つてゐた。櫻草に似た紅色の花をつけた草が小流の周圍に咲いてゐた。三十分許りを二回目の朝食に費して、教へられた通りに拜殿の左手にある指導標から山道へ這入る。

又一段高い臺地に出た。指導標があつて「右稜山及杖立ニ至ル、左鷹座集展望臺ニ至ル」とある。こゝは本當の鞍部よりは二町許り手前である。(〇時半)大きな唐松が草原の所々に立つて居り二千米突の頂稜上とは思へぬ程暢んびりした気分だ。後で氣がついたのであるが休むならば鞍部まで行つて置いた方がいゝ。そこからは白峰三山が眞正面に見えるからである。

吾々はリュックを置いて櫛形の最高點(二〇六〇米突)に向つた。臺地へ登つて一寸下りにかゝる時、亂雲の間に白峰の雪の肌が唐松の樹林を透して見えた。南アルプスの雄壯豪快な姿をはじめて見た同行の女性驚きの目を睜つて「アレ何ですか」と叫んでゐた。本當の山の姿を初めて眼にした人達にとつて、此の叫びは眞實の胸底からの叫びであつたらう。私達だつてさういふ時が嘗つてあつた。グイスブの谷を過つて行つた登山者は、ある道傍の岩角を曲つた時に、マツターホルンの餘りの巨大さに、そしてその頂の餘りの高さに、思はず息の詰まる程の感銘をうけるといふ。ヒマラヤの巨峰にしてはさうだと思ふ。出來れば私も再び三度、此の新しい驚異に眼の邊りぶつかりたいものと思つてゐる。

所で此の小鞍部附近の東側は秩父の雁坂峠或は大菩薩邊りを彷彿たらしめる風景であつた。期待してゐた櫛形山の最高點は森林が深くて眺望

皆無。がつかりしてリュツクのある所へ直ぐ引返す。往復三十分であつた。

一時五十分出發。直ぐ「裸山に至る」といふ導標にぶつかる。そして右へ行く道は直ぐ向ふの頂稜の樹林

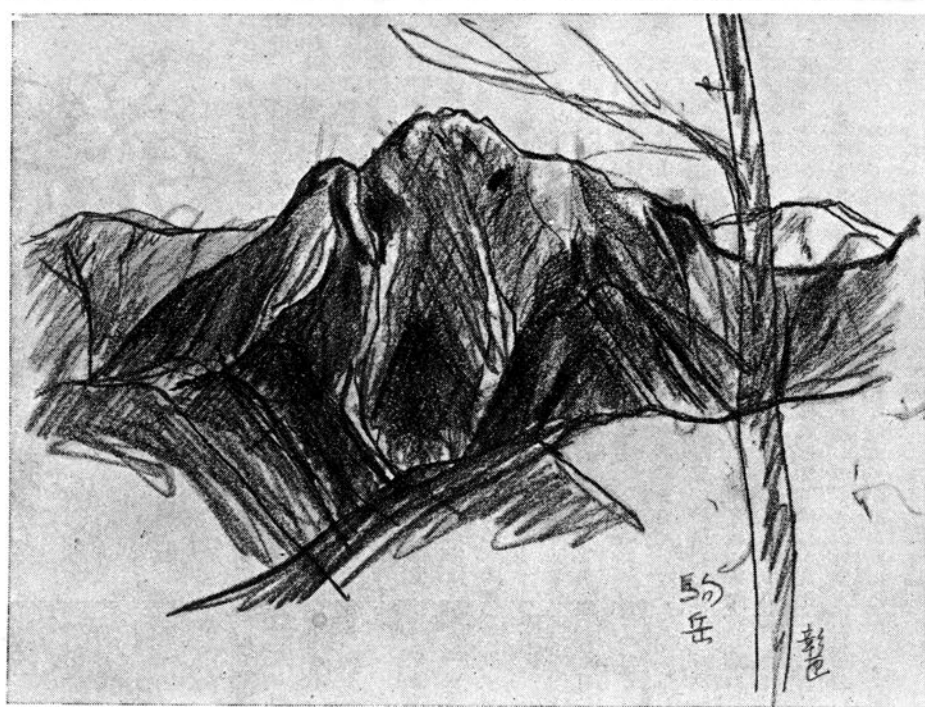
帯に這入つて行く。裸山といふから私はそれを唐松（一八五六米突）邊りの一帯の總稱と考へてゐたが此の指導標から見ると違ふらしい。兎に角鞍部へ行つて見た。白峰三山に對する絶好の展望地であつたが惜しい

事に雲が出過ぎてしまつた。でも時は北岳の頭や間ノ岳、農鳥の山稜が姿を見せる。鹽見は櫛形山の頂稜からは見えないのではないかと思ふ。此の頂稜は晩秋初冬の頃でない

と西側の樹林のために地圖から想像する程南アルプスの展望は得られない事を知つた。本當に展望の利くのは唐松三角點だけである。

鞍部からは地圖にある様に道が西へ下りてゐる。仍で吾々は斜めに横切つて頂稜の細徑を辿る。二十十分

であつたから丁度中山（二〇〇二米突）の東北に當る邊と思ふが「裸山を徑てお花畑に至る」といふ指導標が北向きに立つてゐた。先きにあつた指導標により裸山とは上荒井澤の方面にあるのかと考へるのを變へてゐたが、此の指導標の出現により今度は、裸山といふのはこゝから中山との鞍部並びに先づきの鞍部を結ぶ間を指すらしい事がわかつて來た。一帯に森林が深いとその間だけ裸山で一種の展望道になつてゐるのではないか知ら。之から約十



甲 斐 駒

古 田 彰

「こゝの駒は全くだすよ、わたしやね、年がら年中、甲府と松本の間を行つたり來たりしてゐますがね、駒はこゝが一番いいですよ」

私はこゝう言う言葉に筆を止めた。そこには四十過ぎ位の、瘦身のナツバ服を着た人が立つてゐた。こゝは小淵澤の驛の材木の上である。彼の語るところによれば、彼は機關手であるそうである。そして繪を愛し、又自から繪を畫くとのことである。彼の立つてゐる少し先には、彼の機關車がうすい煙をあげて止つてゐた。私は少時彼と駒を語り、又小淵澤の村について語つた。

その後私はいく度か穴山、小淵澤とさまよい歩いた。そしてドッド、ドッドと、あえぐやうに上つて來る一列の貨物列車を見る度に、私はいつも彼が運轉してゐるやうに思へて仕方がなかつた。

列車はその兩窓にハツと駒の風景を豊かに映して、トコトと上つて行つた。すると三人の紳士——少くとも外見だけは——がしきりに窓によつて感歎の言葉を放つてゐた。私は初め駒でも見てゐるのかと思つたが、どうもそうでなく、彼等はずつと下の方を一生懸命に見つめてゐた。彼等と私は大泉で降りた。こゝは新しいトタン屋根のバラックが建ちならび、赤松の材木がその附近にうづ高く積まれてゐた。

微風はほこりにまみれてゐた。さき程の三人は材木のブローカーか何かであつた。私は急ぎ又小淵澤におりて行つた。

分にして一九二〇米突圍の小丘の南に位置するお粗末な小屋についた。小屋とは名許りの此の小屋の壁の、眞新しい立派な板に「櫛形山ホテル」と墨痕鮮やかに書いてある。洵に開いた口がふさがらない。一度赤石や聖、魚無河内などの南の尤物が見えたので寫眞にとる。小屋から唐松三角點まで三十分。仙丈の一角や甲斐駒の尖峰が雲に取捲かれて見えたり隠れたり。大崖頭山は直ぐ前に黒々と立ちだかつてゐる。

さあいよ／＼之からは下り一方。地圖では丸山の西で徑が切れてゐるが尾根傳ひに歷とした道がある。富士川の低地を距て、見る富士の姿は飽く迄崇高であつた。高尾の部落へ這入つたのは四時二十分。之から平岡の北を通り上宮地の發電所（五時）の所から左の道をとつて部落に入り森をぬけて銀山橋へ下りついたのは五時二十五分。此の橋の位置は癩病院の記號の直ぐ南である。八ヶ岳が雲の上に聳えてゐた。小笠原の驛が五時四十五分、六分待つて五十一分の電車で甲府に向つた。之が甲府發六時五十七分、新宿着十時五分の列車と丁度連絡する電車であつた。

以上によつて櫛形山の案内記は終つたが、時間的に考へたら日歸りの旅としては必ずしも強行軍ではない事を知られるだらう。櫛形山の登山の季節は色々の意味からして三月の終り、又は冬の初めが最もいいのではないかと思ふ。



小森宮章正君を偲ぶ

金山淳二

小森宮章正君が見習士官として入營中、急性肺炎にて去る四月三日、奉天陸軍病院にて戦病死された。あんな元氣のいい男でも病氣には勝てぬと見え、氣の毒をしてしまった。

私は同君の葬儀に列した歸途、フト『山で死なせた方がよかつたかな』と考へた。その方が小森宮君自身としては、死場所を得てゐたかも知れぬ。その『山』と言ふのは穂高や剣、況や谷川邊りのことではなく、もつと大きく、人間の臭などまだ嗅いだこともない山のことである。

もし、そんな處で死んだら、屍だつて見付かるかどうか分らぬ。數年後、再び遠征隊によつて氷漬けとなつて發見されるかも知れぬし、大氷河にたたきつけられ、食料の空箱で作つた十字架をモレーンに立て、墓とせねばならぬかも知れぬ。

これでは死んだ本人は好きな山のことだし、山が永遠の墓守をして呉れると言ふので本望かも知れぬが、その時の隊員には言及しないとしても、遺族の方々には想像以上の御嘆きがあると思ふ。

それに遠征隊と言ふ様な社會的注視の環境にある場合には、社會的な

影響も考へねばならぬ。獨逸や英國みたいに登山と言ふものが一般に理解されてる國は兎に角、日本に於ては遠征隊の遭難は、次回の遠征を益益困難ならしめるだらう。

況や現役連中の親達の心配を倍加させ、親孝行な連中は三度に一度は危い山行を中止し、弟妹への登山奨勵に苦心を加へるかも知れぬ。

こんなことを色々考へ合せて、やはり病院のベッドで、しかも戦病死として逝いた方がよかつたのだと考へた次第である。

私が何故こんなことを考へたかと言ふと、小森宮君は軍隊から歸つて来るや否や、可能なる範圍に於て、遠征隊とまでは行かなくとも誰か仲間を誘つて、まだ地圖も出来てない様な地方へ、出かけるに違ひないと思つてゐたからである。

小森宮君の説によると、學生時代は登山の修練時代で専ら自分を鍛錬し、各部員の素質を高めて以て山岳部全體としての充實を計るべきで、海外遠征は卒業後にすべし、と言ふのであつた。結局學生には重荷過ぎると言ふのだ。

そして小森宮君はこれを實踐せん

としてゐた。

『登高行』九號、十號、十一號を繙いた者は誰でも、よくもこんなにしかけたものだと驚くに違ひない。併し數に於てばかりでなく、小森宮君の登山には多分に思案があり、研究があり、發展があつた。

今私はこれらに就いて説明する煩を避けたい。願はくば、前記『登高行』中の同君の書いたものを讀んで戴きたい。

同君の登山經歷を顧る時、雪中露營の研究が大きく浮び上る。昭和八年一月、始めて穂高主稜の一角に天幕を押し進めて以來、十二年三月卒業の時、北穂高岳露營地を中心として瀧谷を次々とやるまで、左記の如く雪中露營に終始してゐる。殊に雪洞の研究に於ては、同君に負ふ所非常に大なるものと信ずる。

昭和八年一月	西穂高岳露營
同 八年三月	剣岳露營
同 九年一月	槍ヶ岳露營
同 九年三月	北穂高岳露營
同 十年一月	奥穂高岳露營
同 十年三月	剣岳露營
同 十一年一月	剣岳、早月尾根より
同 十一年三月	早月尾根より剣岳へ
同 十二年一月	早月より剣岳ハツ峠
同 十二年三月	北穂高岳露營

又同君の登山經歷を通觀すると、多分に旅行家的性格のあつたことを知る。學生時代一ヶ月以上も東北地方をブラツキ廻り、時に山に登り、都會に遊び、先聖方を訪れた。これが卒業後には大連、鞍山から松花江の

移民村、興安嶺を越えて海拉爾と發展し、ホロンバイルの草原を特務機關の自動車に便乗して飛び廻つたりした。この時ハロンアルシャン邊りの包の中から見覚えのある顔が出て來たと思つたら、これも有名なバガボンデア加藤泰安君であつた由だ。

この旅行は十二年七月からで、途中で支那事變が起り、熱河には入れず、九月溢々歸つて來た。

その翌年夏は臺灣へ行つた。これに就いては近刊の『登高行』七月刊行豫定に詳しいから略すとして、十月から十一月にかけては、こんどは方向を變へて北海道平地旅行をやつた。この時は坂本直行氏始め北大の先輩に會つてゐる筈だ。

この旅行中、翌年一月入營の積りでゐたのに十二月入營と決定、登別なんかの温泉でいゝ氣持で漬つてゐる最中電報を受取り、大慌てで東京へ歸つて來た。これが同君のバガボンデアとしての、最後の逸話となつてしまつたのである。

そして十三年十二月十日、麻布三聯隊に入營、直ちに渡満、博學と熱情から模範兵となり、人氣者であつた同君も、惜しくもこゝに夭折されたのは誠に残念であり、獨り慶應山岳部、登高會の損失であるばかりでなく、日本山岳界全體としても大きな損失であつた。

私は今、小森宮君を追想して默文をものした。これも同君を悼む心の現れからである。



獨り旅

山田奈良雄

私の山登りは登高だとか登攀だとかいふやうな難しい種類のものではなく、山旅といふ言葉の方が、びつたりとする種類の山登りである。

私は、獨りで山へ出かけることが多かつたが、單獨行といふやうな勇しいものではなく、獨り旅の風韻をなつかしむたのである。

それは、時には、一杖一笠の見るからに靜觀的な山旅である場合もあるが、アイゼン、ピツケルを必要とするやうな場合であつても、私の心は岩や氷へ挑むのでなくて、いつも靜かに自然に融けこんでゐるのであつて、私は常に靜觀的な獨り旅を楽しんでゐた。

私は、自分は獨り旅の好きな登山家であると思つてゐたが、近頃では私の周圍に私と同じやうな山旅を好む人達が次第に數を増してきて、それらの人達の中には、私に閑のある時に、いつ誘つてみても、私と同行す

ることの出来る人達もあつて、私はいつも、それらの人々を誘つて山へ入ることが出来るやうになり、獨り旅の機會は次第に少なくなつてきた。たま／＼不意に得た閑暇を利用して、どこかの山へ行つてみたいと思ふとき、誘ふ人達がすべて繰合せの出来ないときなど、獨りではつまらないと思ふやうなときへあるのに本當は私は獨り旅が好きだつたのではなく、やむを得ずに獨り旅をしてゐたのではないかと思ふ。

私と同じやうな態度で山へ入つて行く人達を、私の周囲から求められなかつたのと、たまに求め得ても職業や勤務の關係で、時を同じうして休暇をとることが出来ないで、可成り私の強い私としては、氣性の合はない人達と山旅を共にするよりは、むしろ獨り旅を好んだのであらう。

それに、私は若くて、多くの山を知らなかつたので、出来るだけ多くの山を知りたいと思つて、よほど心をひかれた山でない限り、二度と同じ山へ、同じルートから登ることを欲しなかつたので、なほさらに同行者が制限されてゐたのであらう。

だが、よき同行者を手近く求め得るやうになつてからは、山そのもののよきよりも、同行者のよさが山旅のよさに、大きな影響を及ぼすものであることが分つてきて、未知の山でなくとも、曾遊の山から新しいものが得られることを知るやうになつてきた。

てきた。

山旅に誘つた友が、何かの都合で出られない時など、その山を獨りで楽しむのはもつたないと思つて、また次の機會まで、せつ／＼の計畫を中止してしまふことさへあるのは、私の心の大きな變化である。

それでも、時には獨りで出かけてしまふこともあるし、他の友を誘つて出かけることもあるが、そんなとき、お天氣もよく、山も楽しかつたときには、あの友も来ればよかつたのにと、獨りで出かけてきたことや、他の友と出かけてきたことが、本當にすまないやうな寂しい氣がする。

獨り旅は、他人から受ける束縛がなくて、氣樂でいゝけれども、この頃の私は、自分だけが山を楽しんでゐることが出来なくなつて、自分の樂しみを他人にも頒ち與えたいので、誘つた友が山へ行く閑が出来なかつたら、その友の爲に、その山を残しておいてやりたい思ひやりが出来てきて、私の獨り旅は次第に少なくなつてきた。

私は孤獨にはなれない人間であることを知つて、私の人生觀にも大きな影響をもたらした。

山は私の一生を支配する。私の山旅は、人の棲む世界から逃避するのでもなく、生活を逃避するのでもない。



山 紹介書圖

辻村太郎氏著
岩波新書

山

同じ新書の一冊に「海」が收められたとき、この「山」が早く出ればよいがと期待してゐたのは、私一人ではなかつたらう。さうは豫期しながらも著者が人一倍丹念に、用意周到に物事をされるといふ風に書いてゐた私は、その實現は相當におくれるものと思つてゐたのに、今シーズンを前に早くもこの出版となつたので、實は少なからず面喰つたわけである。

この著書の主なる目的は一言にして云へば、地理學者として世間一般の讀者に對して山の一般概念を與へるにあつた。そしてこの意圖はこゝに十二分に果されてあるやうに思ふ。この序文に「限られた時間に深山の事柄を傳へやうとして百科辭書に似た體裁」をもつものとなつたと斷り書きしてあるやうな缺點はあるにしても、かう手際よく纏められて

ゐるのはまた辻村氏なればこそ出来る仕事なのだらうと私かに敬服する。

しかし、山に特別の愛をもつ私達から見れば、この著書には不満足を感じないではない。とにかく山といふものには事の大小に拘らずいつも深い關心を抱き、また山については體系的でないにしても、各方面に相當深い、しかし斷片的な、知見を自らに蓄へてゐる私達は、一面私達のこれらの知見がいかに獨斷的で偏頗なものであるかをこの本によつて明らかに得たことを感謝する。がその他面に於いて、この記述が餘りに全般的平板的であるがため、我々の知りたいといふ今一步の處で説明の行届かない箇所が多く見出され、その點で私達は失望させた。あるひとはかゝる要求そのものが、一般的教養の向上を目的とするこの類ひの本に對しての無理な注文であるかも知れないが、とにかくさうした物足りなさをこの著書から少くとも私は受取つた。

かういふ餘りにも懇切丁寧な、教科書風な記述が、かへつて一般讀者には、山とはこれだけのものかといふ様な浅い印象をしか與へ得ないで、山へ一般的關心を強く振り向けさせるといふよりも、その關心をそぐといふやうな反對の効果を與へはしなかつたらうか。山といふもののもつ二三の主要な特色をとり出して、それについて相當深く掘り下げ

て記述されるといふ行き方が、私達にも一層面白く受取れるし、また一般人に對してはそれが不親切なやり方であつても、山とはこんな特徴ももつてゐるのか、少しづついて見やうといふやうな興味を新しく喚び起さしめる氣線を作ることにもなりはしなかつたらうか。この點で、「海」「雪」「雷」などはかへつて成功してゐるやうに思ふ。

ともあれ、この「山」によつて、私は何年かの昔中學で習つた地形、地質などの知識を再び私の腦裏に甦らしめ、また登山の間に自ら蓄積されていつたこの方面の斷片的な知見を一應整理させることのできたことをこゝに感謝する。と同時に「景觀」といふやうな題目についても更にさうした機會を與へて頂きたいと私は期待するのである。妄言多謝。

(黒田孝雄)

Alpine Journal

Vol. I, II. No. 260

(May 1940)

近着のA・Jを見る。昨年のヒマラヤ遠征の記録は僅かに瑞西のガルワール遠征が André Roeh に、"Garhwal 1839: The Swiss Expedition" の題下に述べられてゐる外は、ティルパンの "Assam Himalaya Unvisited" (別記 G・J のものと大體同じ内容) がある許りでいさゝか物足りなう。

アルプス關係のものである、例のヌ

マリスがガヴィンと共に登つたドオ
ファイネとモン・ブラン山群の紀行文
がある。スマイスはヒマラヤに行か
ぬ年はアルプスへ出掛けると云ふ具
合に、相變らず活躍の跡が目ざまし
い。尙餘談だが本號の圖書紹介欄を
見ると、最近又彼は三冊の書物を上
梓してゐる。("Edward Whymper"
1940, "Adventures of a Mountain-
eer" 1940, "A Camera in the Hil-
ls" 1939.) 少し本を書き過ぎるとさ
ふ批評が一部には聞えてゐるが、そ
の健筆振りはさうか驚歎に値す
る。

次に注目すべきは A. E. Gunther
"A Visit to the Andes of Venezu-
ela" p. 南米アンデス山脈中比較
的未開なこの地域の山群への登攀
が、興味深く述べられ、登攀史や文
献等が稍詳細に加へられてゐるのは
至極便利である。

以上の外に左記の文章があるがま
だ詳しく讀んでゐないので、題名だ
け擧げて置く。

Cecil A. Hut "Sketching in the
Alps." M. Roberts "The Poetry
and Humour of Mountaineering,"
G. W. Murray "In and out of
Saas." F. S. Copeland "Lost
world in Camilla." E. B. Beau-
man "The Matterhorn Colour
by night."

追悼欄には C. G. ブルースのこと
が、ナイティンゲール、ロングスタ
ッフ、ストラットの三氏により述べ

られてゐる。

尙最後のアルバイン・ノーツには
ウェストン師の死が報ぜられ、本會
から打電した弔文(會報九十四號參
照)がのせられてをり、且本年十一
月號の追悼欄に詳細を述べるとあつ
たが、これには誰方か吾が國の登山
家からも是非追悼文を寄稿して戴き
たいと思ふ。その他この欄には、一
九三九年の米國セント・エライヤス
遠征の簡単な報告、著名なサン・ニ
コラスのガイド、ロッホマター家の
こと、パンデヤブ・ヒマラヤのラホ
ウルへの小遠征(一九三九年)等が記
されてゐる。

圖書欄に擧げられてゐた J. Wa-
lter "The Everlasting Hills" 1939
は中々面白相な本である。(望月記)

Geographical Journal

近頃の英國王立地學協會誌から、
登山とか探検に關したものを拾ひ上
げてみると次の通りである。

一九三九年の十月號には、東部西
藏の探検家として有名なキングド
ン・ワードの "Irrawaddy Plateau"
あり(之とは同じ内容のものは、
一九三九年の H. J. に收められてあ
る)、「イラワディ河水源のカカルポ
ラディの山々に就いて述べ、十一月
號にはティルマンの "Peaks of the
Assam Himalaya" が掲載されてゐ
て、カントー山群試登の様子が述べ
られてゐる。

一九四〇年二月號には、一九三八

年のマッシャブルム遠征の稍詳細な
報告(之も既に H. J., A. J. に載
せられた)があつた。以上の内前二
者は雑誌「旅」に後者は「山と溪谷」
誌上に吉澤一郎氏が紹介の勞をとら
れてゐるし、マッシャブルムは本會
報八〇號にも略述してをいたから、
繰返す必要はなからう。

四月號には、カラコラム新地圖の
紹介があつた。これは一九三七年の
カラコラム會議で同地方の山名、地
名がほぼ確定された結果、この勞多
い仕事に多年没頭してゐたケニス・
メイスン教授監修の下に作成された
もので、縮尺七十五萬分の一、八色
刷とある。本會としても是非購入し
てをきたいものである。

五月號には J. Hanson-Lowe の
"A Journey along the Chinese-Ti-
betan Border" の一文があり、一九
三七年に於ける打箭爐から甘孜附近
の旅行のさまを述べてゐる。彼は地
球形態學上の問題について、この邊
疆を踏査したが、その學問的結果は
別に一書を上梓中とある。本稿は此
の附近の近況を知るにかなり役立つ
ものであらう。行程は打箭爐から西
進し、二、三の峠を踰えて裏塘へ、
更に鴉礪江沿ひに北上して甘孜に達
した。甘孜山脈の聖峰 Ka Wa Lu
Jin (別書にはカワロリイと記さる)
に付き記し、東南方へひきかへして
ジャラ山近きハイツウ峠を経て、打
箭爐へ歸つたものである。寫眞數葉

あり、ジャラの雪嶺は美しい。

東京市山岳部年報(4)

六月一日發行
東京市役所體育會山岳部
非賣品、一二九頁
寫眞六葉

本號の記録は昭和十二年と十三年
の二ヶ年分だけしかない。十五年六
月の發行としては少くとも十四年度
分までを入れてなければ意味が薄い
と思ふ。整理の方法にも尙一考の餘
地がある。

巻頭に木暮さんの「偃松の匂ひ」
が載せられてゐる。偃松と偃柏心と
の關係、偃松の生育する上下の限界
等を説明せられ、その禮讃からそ
の昔偃松と關はれた思ひ出等が簡單
に述べられてゐる。

「グリーンランド初横斷記」はナンセ
ンの "The First Crossing of Gree-
nland" の最初の二章を譯したも
の。(譯者千葉氏) こうしたものを
譯譯する場合には、簡單でもよいから
多少グリーンランドの探検史を書
いて同史上に於けるナンセンの占む
る位置を瞭りさせて置いた方がよ
う。地圖も欲しい。

河野氏(之は小野幸氏のペンネー
ムとの事)の「富士山私記」は先日
倫敦で逝去されたウェストン翁の著
になる "The Playground of the
Far East" からの抜萃譯である。
ウェストンと富士山との關係を知る

にはいゝ參考とならう。

「四季の富士」木曾駒より空木岳
「金峰日記」は夫々石原、山本、山田
の諸氏による小品である。

最後は特輯的に編輯したらしい
「山小屋拾遺」となつてゐる。井田庫
造氏の「秩父の小屋」は武州側に於
ける小屋の歴史を書綴つたものであ
つて大變參考になるが、私としては
之をもつと悉しいものにして本欄に
載せて貰ひたかつた。最後に寫眞は
六枚とも失敗である。(吉澤記)

京濱山岳團體聯合會 の結成

從來自然發生的に獨自の發達を遂
げてゐた山岳團體の横の聯絡を必要
とする氣運が醸成され、先づ全國的
の山岳聯盟結成の前提として、東京
横濱地方山岳團體が聯合會を組織す
る計畫が具體化し、左記十二團體が
發起團體となつて、去る六月十九日
結成會が催はされた。

東京登歩溪流會、東京市役所山岳
部、千代田生命山岳部、築地山岳
會、武藏山岳會、松尾山岳會、あ
けび會、山岳巡禮俱樂部、山人俱
樂部、明峰山岳會、昭和山岳會、
横濱山岳會

尙會からは吉澤、角田兩氏理事が出
席した。

右聯合會の事務所は左記の通り。
・東京市神田區小川町一ノ一〇
好日山莊 海野治良氏方

會員通信

春の尾瀬 島田 巽

三月末日から四月三日までの四日間まだ雪深い尾瀬を訪れました。戸倉まで一日、戸倉から三平峠を越へて長蔵小屋まで一日、と沼へ行くのに四日の内二日をとりましたが、それでも割合内容豊富なスキー行でした。往路は清水からはスキーがはけ、長蔵小屋附近では充分三米はありました。第三日目は燧岳に登ってから原の東電小屋まで行きました。朝の雲行きが悪かったので燧岳は断念しかけたのですが沼を横切る途中急に晴れ上ったので登りました。山頂は相當の風ながら大観は十分に楽しめました。滑降も相當に愉快なものでした。第四日は東電小屋から下田代を横切つて、富士見峠を越へ、戸倉の裏山まで滑つて、その夜八時四十分には上野へ歸れました。四日間他のパーティに一組も會はぬ静かな旅、夏と違つて明るい尾瀬の風光を十二分に楽しんで來ました。

蒙疆より 北田 正三

遙かに諸先輩の御健康を祈ります。張北を経て、徳化より商都、平地泉へ一寸小手調べの旅を了へて張家口に歸つてます。六月いよいよシリゴールの奥へ、更に陰山の西北

へ突進します。ヤングハズバンドに負けない意氣と熱で。(張家口にて)

中支便り 濱野 正男

御無沙汰しました。京大の富士の登山の新聞を拜見しました。内地の連中も未だなか／＼元氣のことゝ喜びました。母校の連中も穂高の春をなか／＼の實力以上の仕事をやつた様子、喜んでゐます。モンスーンの影響があるのか、この長江なかなか面白いところもあります。丘も山も皆緑一色です。山麓の緑をふと思ひ出すこともあります。

藪ウグヒスも調子のハズれた聲で啼くときもあります。小生頗る元氣で軍務についてゐます。皆様よろしく。(五月十一日)

☆ 柳田 國男

御懇篤な御手紙をいたゞき感激しました。別に不満といふほどのことは無くて名を連ねたのみで、若い人との話は合はず、又山に登る折ももう無く、雑誌には印度や何かの記事が出る故一寸勝手がちがひます爲に、退隱しようとした迄です。是非とも出なければならぬ事情はありませんから快く退會届を取消することゝ致します。(別記の通り退會取消)

本年度會費納入お忘れの方は至急お願ひします 會計係

◇谷川岳山小屋

建設の後援◇

最近頻々として起つた遭難に鑑み、地元水上村では關係有志と協力の上、谷川岳頂上附近に、建設費八千五百圓の山小屋を建設することゝなつた。小屋の位置は大體谷川岳頂上西方肩の平地の由である。本會としても、別記理事會決議にある通り、本件に關しては出来るだけの援助、指導を與へることゝなり、差當り左記の通り會員有志各位より建設基金の募集をすることゝなつた。

・金額に何等制限なし。
・送金先 日本山岳會事務所
本會としては設計、設備、管理等に就き指導を惜しまない積りである。各位よりの熱意ある應募を期待し、本山小屋建設に應分の協力をしたいと思ふ。

會務報告

七月定例理事會報告

七月十一日(木)午後七時

於虎ノ門本會事務所

出席者 木暮、武田、冠、英木、木村、黒田、三田、藤島、吉澤野口、加藤、石原、角田、高橋塚本、望月

一、社團法人の件

一、山日記の件
發行所を三省堂、編輯者を吉澤理事とし、本年十一月末頃發行の豫定と決る。

(外國留學中)
右二氏昭和十五年より終身會員。
退會取消
六七番 東京府 柳田 國男

一、會報編輯報告
一、京濱山岳團體聯合會の件
一、登山用具資材配給方申請の件
一、谷川岳山小屋建設援助指導の件
一、左記新入會員入會承認。
船本文治、松田一郎、安達春雄、東濱義男、河崎正明、青木正雄、阿部武道、林和夫、藍田務、深澤吉郎、小熊小五郎、青山學院高等部學友會山岳部(代表者松崎和夫)

終身會員

田口一郎(外國留學中)、田口二郎



會務報告

六月定例理事會報告

六月十一日(火) 午後六時三十分
於虎ノ門事務所

出席者 高頭、武田、島山、楳、
藤島、角田、吉澤、芙木、中司

一、社團法人の件

一、「山岳」三十五年第二號は十月乃至十一月発行の豫定。

一、會報編輯報告。

一、山日記の件

十一月下旬發行の豫定。

一、京濱山岳聯合の件

一、登山用具の資材配給を受けるに付厚生省の意向打診のこと。

一、新入會員左の通り承認せらる。

山賀榮一、關戸順吉、山崎安治、

佐野和男、井上篤治郎、方炫、船

戸節夫、中元銀弘

第九十五回小集會 (關西)

昭和十五年五月十四日 於清交社

一、スイス雜誌

藤島敏男氏

世間も山岳界も何だか割り切れない落ちつかない気分にある時、こうして遠いスイスの山の話を聞くのは

心のどこかを慰められるやうで、安易な氣持を以てお話が何へ、非常にのびやかな集りであつた。

お話の前に氏自身寫してこられたアルプスの美しい寫眞を多數拜見さして頂き、山戀ひの心を呼び起しただ見ぬスイスアルプスへの憧れを強く感じさせられた。お話は氏が昭和十年から十三年にかけオーバーランド、エンガディン、ワリス等スイスの山旅に出かけられた時の順に従ひ山の様子、日本アルプスとの比較、登山者の態度、山小屋内の出来事、山村の景觀と雰圍氣或ひはスキー學校風景といふやうなものに就いて。美しい自由詩をよむやうな淡々としたお話であつたので宛かもスイスの山麓に在つて何ふが如き、氣持になつてしまふ。又最近における山案内料やどの位の費用を要するものかなど一寸想像だけでは見當のつかないお話もつけ加へて頂き參考となつた。

久し振りの小集會であつたが當日は丁度山の集りが外に三組もあり出席されない人のあつたのは惜しい事と思つた。參會者十七名(富田記)

第九十六回小集會

第九十六回小集會は都下學校山岳部の最近の收穫に就いて講演を願ふ

こととし、五月二十三日午後六時半より日本橋日本商工俱樂部に於て開催した。二十八度にも昇つた晝間の暑さであつたが、ビルの四階の窓か

郎、以上二九名、會員外四二名。

ら吹き込む涼しい夜風に當りながらスリルを含んだ潑刺たる話を聞くことの出来たのは幸であつた。最初に早大の關根吉郎氏は「明神岳東稜に於ける一つの試み」と題して、本春この目的に對して展開された同學山岳部の綜合的有機的行動に就て語られ、それを中心として過去及び將來に於ける學校山岳部の有り方と言つたものに對する見解を示された。次で東商大の大塚武氏は「北穂高瀧谷」の題下に同じく學生登山者としての眞摯な内省、及び態度に就いて示唆多きものを披瀝され、今冬試みられた瀧谷第四尾根の登攀を極めて印象的な言葉で語られた。終つて兩氏の持參された寫眞を幻燈に映して感銘を加へ、十時少し前散會した。時間がなくて討論を充分に盡すことの出来なかつたことは遺憾であつたが、兩氏の講話には我が登山界、乃至日本山岳會の將來に就て示唆する多くの問題を含んでゐた。當日來會者七十一名、特に學生諸氏の多いことが目立つた。

(石原記)

出席者左記の通り

吉田竹志、木村鐵吉、堀田彌一、大熊保夫、土屋鎮雄、芙木猪之吉、佐藤誠次郎、宮崎二郎、角田吉夫、額田敏、田邊主計、佐藤貞吉、寺澤一磨、黒田正夫、酒井忠一、藤岡健藏、西岡俊雄、藤野關夫、崎田照、石原巖、黒田孝雄、横有恒、浦松佐美太郎、三田幸夫、關根吉郎、五十嵐清三郎、鈴木正俊、望月達夫、吉澤一

ミツサツの
専門店
片相
レント店

本邦天幕製
作業之嚆矢
各學校山岳
部指定製作

東京市神田區神保町三ノ一
電話九段(三三)三二一〇

昭和十五年七月五日印刷
昭和十五年七月十日發行

東京市杉並區馬場二ノ二四〇
編輯者 望月達夫
東京市目黒區中目黒一ノ七四二
發行者 塚本繁松
東京市芝區榮平町一(不二ビル)
發行所 日本山岳會
電話芝(四三)一六四九
振替東京四八二九
東京市芝區濱松町一丁目十三番地
印刷者 植田庄助
印刷所 成文堂印刷所